1　お話朝礼

去年までは日本の昔話が主でしたが、今年からは外国のお話も取り入れ、二回の続きものも始めました。また教室の前に掲示板をおいて、そこに前回のお話朝礼で提出した漢字をカードにして貼っておくことにしました。子どもたちはお話朝礼がとても好きなようです。お話朝礼がある朝はきちんと席につき待っており、休み時間には掲示板の前に立ち声をそろえ漢字カードを読んでいました。

＜あらすじ＞栗鼠のお母さんと子どもが森を散歩していると、熊の風船屋さんがいろんな色の風船をいっぱい持ってやってきました。子栗鼠はお母さんにねだります。一つ買ってもらうと、また一つ、また一つ……とたくさん手に持ちました。すると子栗鼠は空へふわふわと浮いて上り始めました。さあ大変、動物たちがやってきて助けようとしますが、なかなかつかまえることができませんでしたが、やっとのことで、鷲が助けてくれました。〔一学期〕5 月 21 日「魔法の魚」（『ラング世界童話集』から）

＜提出語句＞魔法の魚　海辺の村　わがままな娘　紅色の魚　頭　顔　息　魚　城　女王様　人魚　魔女　冠

＜指導メモ＞「魔」の字を板書すると、子どもは「あくまのま、まほうのま」と言います。「よく知ってるね」とほめてやると、「まじょのま、だもの」と得意そうでした。「娘」と書くと「むすめ！」と、答え、さらに「娘って何？」と聞いてみると「おんな」「女の字があるもの」と答えました。お話が終わった後に、板書した字を全員で声をそろえて読んでみました。「一人だけで読める人？」と聞いてみると、男子の三人、女子一人の手が挙がりました。

5 月 28 日　「魔法の魚」（つづき）

＜提出語句＞魔法の魚　女王様　わがままな娘　魔女　冠　森　鹿　猟師　王子様　高い壁　蟻　高い塔　猿　重い病気　蚊　魚

＜指導メモ＞「魔法の魚」から「冠」まで前回提出した漢字のカードを貼りながら、前回までのあらすじを話して思い出させました。「猟」の字は誰も知らず、「ひつじ！」と言ってみる子どもがいました。「蚊」を板書すると「だに！」と声があがったので、「虫に文がついているでしょう。ブーン」とヒントを与えると、「あ、そうか、かだ」と気づきました。

6 月 3 日　「とんで逃げた鬼」（『島根の昔話』から）

＜提出語句＞斐川町　昔々　金持ち　田植え　赤ら顔　大男　稗　一俵　機織り

6 月 10 日　「金の服と布の服」（『ラング世界童話集』から）

＜提出語句＞猫　召使い　お母さん　姉娘　妹娘　金の服　布の服　鳩　鳩の方を向く　金の星　馬　反対の方を向く　金貨

＜指導メモ＞今日は長崎県の長里小学校から先生方の視察がありました。子どもたちは見知らぬ人がいて緊張したのか、初めは落着かないようすでしたが、やがて慣れていつものようになりました。「姉娘、妹娘」が出た時、一人の男子から「女のきょうだいには女がつくみたいに、男のきょうだ

いにはやっぱり男がつくの？」という質問が出ました。これは「漢字」の特質に気づいている質問といえます。

6 月 11 日　「金の服と布の服」（つづき）

＜提出語句＞お母さん　猫　召使い　姉娘　妹娘　お后様　王子様　井戸　金の星　馬　金貨　尻尾　金の服

＜指導メモ＞毎週金曜日に決めているお話朝礼を、他校の先生方の視察のため昨日に変更したのですが、「金曜日はお話朝礼の日でしょう！　だからお話をして」と子どもたちから強くせがまれ、前日に続いてすることになりました。

6 月 18 日　「アカショービン」（『加古里子のお話 12 ヵ月』から）

＜提出語句＞梅雨　南の島　昔　庄屋　親子二人　納屋　蔵

＜指導メモ＞かわいそうなお話なので、静かなふん囲気で聞いていました。

6 月 25 日　「小さな国と大きな国」（『ラング世界童話集』から）

＜提出語句＞王様　隣りの大きな国　大臣　椅子の回り　黒い輪　学者　柳　機織り機械　積み木　鳥籠　男の人　麦　鳩

＜指導メモ＞お話の題名は、最初に板書する場合と、お話が終わってから教える場合とがあります。後者の場合には子どもたち自身に題名を考えさせる場合が多くあります。今日のお話の題名も子どもたちが考えたものです。

7 月 2 日　「七夕の星」（『加古里子のお話 12 ヵ月』から）

＜提出語句＞天の川　アルタイル　ベガ　中国　牛飼い男　牽牛星　機織り女　織女星　星祭り　光の速さ

＜指導メモ＞お話が終わったあと、子どもが教室の前に置いてある“仲良し文庫”の中からこのお話を見つけだし、「あった、あった」とうれしそうにしていました。そんなことがあるといっそう“仲良し文庫”を利用する子どもが増えるようです。

7 月 9 日　「怒り地蔵」

＜提出語句＞戦争中　広島の町　小さな地蔵様　優しい顔　小さな女の子　悲しそうな顔　涙　怒った顔　松山市のお寺　怒り地蔵

＜指導メモ＞出東小では親子読書が熱心に行われており、去年は『かわいそうな象』や『広島のピカ』の反響が大変大きく、また今年の映画会では『人間をかえせ』が上映されました。そんな経過をたどっているので、子どもたちはこのお話をとても真剣に聞いてくれ、いつもは漢字が板書されるとすぐ大きな声で読むのに今日はじ、と目を凝らして聞き入っていました。

〔二学期〕9 月 10 日　「魔法使いのお婆さん」（『加古里子のお話 12 ヵ月』から）

＜提出語句＞深い森の中　約束　黒猫　みみずく　豚　犬　山羊

＜指導メモ＞「蝿が手をする」いわれを面白い話に仕立てたもので、子どもは喜んで聞いていました。ちょうど参観日でしたので、初めて親にも一緒に聞いてもらうことができ、「参観してお話朝礼の様子がわかってよかった」と後で便りを届けてくれた親もありました。

9 月 17 日　「味噌買い橋」

＜提出語句＞乗鞍岳 3026 メートル　長吉さん　炭　夢　高山の町　豆腐星　松の木　長者

＜指導メモ＞夢でみたことを信じて「味噌買い橋」で待っていたらお金持ちになったというお話です。この話を知っている子は大勢いましたが、楽しんで聞いていました。炭がどんなものか知らない子もいましたが、話を聞いて「たどん」を持ち出す子もいたり、昔の暮しに興味を持ったようです。

9 月 24 日 「天女の羽衣」

＜提出語句＞隠岐 飯田 昔 若者 お嫁 着物 お宮 若い女の人

＜指導メモ＞いつもそうですが、子どもたちは提出漢字を全部すらすらと読みました。学年内で学力が一番劣ると思われる子にあててみましたが、その子も一人で上手に読みました。

10 月 1 日 (読み聞かせ)

＜提出語句＞斉藤隆介 もちもちの木 花咲き山 名作

＜指導メモ＞二年生になって初めて本の“読み聞かせ”をしました。教師が直接話しかけるお話も喜びますが、今回のような本の読み聞かせにもじっと耳をすまして聞き入るので、これからも時々取り入れようと思いました。

10 月 8 日 「なみなみの屁っぴりじじい」

＜提出語句＞岩手県 昔 爺さま 長者どん 大砲屁 太鼓屁 梯子屁 籠

＜指導メモ＞教師が岩手県の研究会へ行った時、おみやげとして聞いてきた岩手のお話です。いろいろな屁をする爺さまの話で、子どもたちは大笑いで聞いていました。漢字は、「梯」を「おとうと」、「籠」を「りゅう」と読んだ子がいました。

10 月 15 日 「不知火」

＜提出語句＞熊本 八月一日 昔 火の国 山 野 緑 たける 大男 嫁ご 海辺 約束

＜指導メモ＞「不知火」と板書したら「ふしか」と読んだので「しらぬい」と読むことを教え、熊本県では今でも不知火が見られるということなので、そのことを地理的なことも含めて話すと、興味深く聞いていました。

10 月 29 日 「三太郎柿」

＜提出語句＞昔々 三太郎 柿 嫁さん 柿売り 酒 切り株 茸 穴 池 鯉 鮒 釣り

＜指導メモ＞話の筋にリズムがあってわかりやすく、とても喜んで聞いていました。柿売りの売り声の「三太郎柿、三太郎柿はいらんかあ！」に続いて、茸売りになると子どもたちは先を読みとって「三太郎茸はいらんかあ！」と言ったり、三太郎の頭に穴があくと「今度は池だ」と予想をして、とても面白がって聞いていました。

11 月 5 日 「あとつけぼっこ」

＜提出語句＞お化け 峠 山 森 林 賢い小僧 山寺 一軒 年老いた和尚さん 日が暮れた 茶店 三日月

＜指導メモ＞一年生の時に聞かせたお話でしたが、喜んで聞いていました。何度くり返してやっても昔話を喜ぶのと同じことだと思います。休み時間にお話に出てきた「あとつけぼっこあそび」をする子もいました。

12 月 3 日 「米子と桂子」

＜提出語句＞お母さん　米子　桂子　栗　山姥　鬼　しらみ着物　下駄　祭り　水くみ千回　米つき千回　雀　鼠　長者

＜指導メモ＞「米子」を「よなご」と読んだので、これは人の名前で「こめこ」と読むと教えたら大笑いになりました。米子に続いて「桂子」とまた変わった名前が出てくるので、娘のお母さんの名前もきっと変わったものだろうと「コンバイン稲子」と予想をたてる子もいました。

〔三学期〕1 月 28 日　「白鳥の娘」（東京書籍の国語の教科書から）

＜提出語句＞白鳥の娘　沖縄　久米島　桜　五色の波　昔　岩山　蛤　五箇　白鷺　種もみ

＜指導メモ＞「白鳥」を「はくちょう」、「五色」を「ごしょく」と読んだので、ここでは「しらとり」「ごしき」と読むのだと教えました。静かな話で、子どもも静かに聞いていました。「桜」については、次回で「柊」を出す予定なので、木偏を強調しておきました。

1 月 31 日　「鬼ども山からもう出るな」

＜提出語句＞冬　大寒　節分　立春　昔々　山奥の一軒家　爺様　婆様　女の子　鬼　柊の校　豆　いろりの灰　福の神

＜指導メモ＞長崎県の早岐小学校から先生方が参観に来るので日を変えて行ったものです。いつものようにどの字も大体読めましたが、「柊」だけは読めません。用意してきた柊に似た木の枝を見せたら、翌日自宅から本物の柊の枝を持ってきた子どもがいたり、そのようなことからもお話への関心の高さがうかがえます。

2 月 18 日　「雪の子馬」

＜提出語句＞北欧　昔　ノロマ　男の人　峠

2 月 25 日　「菅原道真」

＜提出語句＞東風吹かば　匂ひおこせよ梅の花　主なしとて　春な忘れそ　千年前　天皇　藤原時平　大宰府　飛梅　北野天満宮　天神　学問

＜指導メモ＞出東小の愛唱歌集にものせている道真の歌をもとにして、それにまつわる故事を話しました。このようなお話は子どもたちには初めてなので、どんな反応を示すか興味がありました。出東小の近くには天満宮があり、2 月 25 日はちょうど道真の命日にあたることから話に引き込まれて聞いていました。

　最後に感想を聞くと「昔話やお化けの話がいい」という意見もありましたが、「今日のお話はよかったわ。うたのことがよくわかって面白かった」という意見がありました。左大臣や右大臣の話が出た時は「前関白太政大臣」と百人一首の作者名を口に出していました。

2　漢字貼り

　昨年までと同じように、読む教材には漢字貼りをさせました。昨年の原稿をそのまま使用して（もちろん、加筆訂正することもあります）、プリントするので、その間の労力が省けます。子どもはハサミやノリを使うことが好きで、漢字貼りの時間を楽しんでいるようです。時には自習時間を利用して貼らせることもありますが、後で必ず教師が目を通すことにしています。

3　詩の暗誦（こころのうた）

一年生の時から朝礼時間に毎月の「こころのうた」をいっせいに朗誦しています。新しい詩になると初めのうちこそプリントを見ながら読んでいますが、二、三日もするとすぐ覚えてしまい暗誦できるようになります。時には覚えてしまっていても、なおプリントを見ながら口をはっきり開けて正しい発音で朗誦することに力を入れることもあります。

「月のうた」以外のうたを暗誦できる子には暗誦した箇所にシールを貼ってほめてやります。強制は絶対にしませんが、興味のある子は楽しみながらどんどん覚えてしまうようです。「月のうた」だけで終わる子もいますが、全員が少なくとも「月のうた」は暗誦できました。

4　授業から

教科書に漢字を貼ってしまったら、その漢字が読めないことには学習が進められません。ですから、全員がすらすら読めるまで音読をくり返し、くり返し行なっています。教師と児童、また児童同士で“追いかけっこ読み”をしたり、全員で揃って朗読したり、席の順で一人ずつ、またはグループ毎に朗読したりして変化をもたせ、興味を持つようにしています。また家庭でもすすんで朗読に取り組めるように、朗読の回数ごとに丸をつけてやり、家の人に聞いてもらい感想を言ってもらったりして音読を奨励しています。

今年度の研究は「読む力を伸ばす指導」です。すらすら朗読できることから、文の読みとりもできているものと考えるのはやや甘い考えで、意外に読みとれていない児童がいます。ですから、どこに何が書いてあるかをおさえたり、ここにこう書いてるから（こんな言葉が書いてあるから）私はこう思うとか、発表が出来ること、つまり考えながら読むことが出来る子どもにしたいということから、このテーマに決まりました。

一学期は自分の考えを持たせるために、まず何度も朗読してなお残る「わからないこと」、反対に何度も朗読したおかげで「よくわかり、みんなに教えてあげたいこと」を見つけさせ、それをみんなに出してもらって解決していく方法をとってみました。

すると意外な子どもが、あっと思うような素晴らしい説明をしてくれたり、反対にこんなことがわからなかったのかと驚かされたりすることが幾度もありました。また子どもの方から鍵となる言葉が出て、それを契機にみんなが深い読みとりをしたという場面も何度かありました。

例１　詩を読みましょう

イ　ちょうちょとハンカチ

一人から「小さな白いものがとんでいく」という箇所から、「小さな白いものって何ですか？」という質問が出ました。すると、当然「ちょうちょのこと」と思っていた子、いや当然「ハンカチのこと」と言う子、さらに「風の子ども」と思っていた子がいることがわかり、教室中が騒がしくなりました。この問題を追求していく中で、ちょうちょとハンカチの関係、位置、様子などがはっきりしてきました。質問の「小さな白いもの」をはっきりさせていく過程でこの詩の読みとりが深まっていったのです。

ロ　波は手かな

「手ってだれの手ですか？」という女子の質問から、この詩の読みとりが深まりました。

例２　苺つみ

熊の「ウーフー」を人間の言葉に直したらどうですかという提案がでました。その際なぜそんな言葉に直したのか理由を文の中から見つけて説明するようにさせました。たとえば「困った声で『ウーフー』といった」のところでは「困った声で」から「困ったなあ」に直しました。ところが他の子が、「なんで困ったと書いてあるかというと毎ジャムとリンゴジャムとどっちが好きって聞かれて、熊はジャムのことを知らないから困ったんだ」というのが出ました。すると「ジャムのこと知っていてもどっちも好きだからどっちに決めようかなって困ることもあるよ」という意見が出ました。さらに熊が「ねえ、さぶちゃん、と呼ばれたとき自分はさぶちゃんじゃないので困ったということもあるよ」という意見も出ました。最終的には「困ったなあ」「どっちにしようかなあ」「ジャムって知らないよ」、また「僕、さぶちゃんじゃないよ」など、いろいろな言葉が集って楽しい学習ができました。

子どもが遊んでいる時や下校中、あるいは読書をしている時などに、ふっと教室で勉強していることを思い出して、もう一度よくものごとを見てみるというように、観察力がゆたかになりました。

――児童の日記から――

6 月 9 日（植田武司）

（前略）すこし行ってみたらたんぽぽがありました。実がだんだんできている時はねころんでいると書いてあったのにそれはうそでした。じゅくしそうになるとねころんでると書いてあってもそれはちゃんと立っていました。ぼくは思いました。ひら山さんはうそをついているかなあと思いました。でも、うそをつくわけないしと思いました。先生どうかおしえてください。（後略）

右の日記は、国語の教科書で、ひらやまかずこ作の「たんぽぽ」の学習をしている頃、教科書に書いてあることと、下校中の道ばたのたんぽぽとちがっていることに気づいて児童が書いたものです。今学習していることに本気でくいついているのが感じられ嬉しくなる日記でした。

5　劇づくり

学習発表会で、二年生は自作の劇を発表することにしました。そのねらいは次の通りです。

イ　その場面の情景にあった台詞や動作を考える。（行間を読み取る学習と関連づけて）

ロ　役柄になりきって、大きな声で台詞を言う。（音読･朗読の力を伸ばすことに関連して）

題材は子どもたちと相談して国語の既習教材の中から、寺村輝夫作「穴に落ちた象」を選びました。この教材は全員が、何度も読んで慣れていて朗読もうまくなっており、子どもが内容の面白さにも気づいていたから、自分のものとして取り組むことができました。

登場人物を学年の人数に合わせて増やす相談をしたら、象が穴に落ちているのを小鳥が見つけることにしたらどうかという意見が出ました。そこで原作にない小鳥を登場させることにし、また象が穴に落ちる場面を教師のアドバイスで挿入するなど、物語がだんだんふくらんでいきました。

登場人物は、象（1 人）、小鳥（4 人）、猿（9 人）、狐（7 人）、かば（5 人）、さい（3 人）、蜂（1 人）と決め、残りの子は初めの場面で観客を物語の中に案内するための寸劇をしたり、地の文を交代で朗読したり、

雰囲気を盛り上げるために歌をうたったりすることにしました。役についた子には教科書の情景をもとにして台詞や動作を考えさせ、場面を自分で構成させました。

＜穴に落ちた象を猿が助けようとする場面＞

(教科書の本文)	(子どもたちが作った場面)
	(小鳥たち)　お猿さぁん。象さんが穴に落ちているよ。
・　猿が来ました。	(地の文１)　猿が来ました。
	(　猿１　)　これはたいへんだ。
・「たすけてあげよう。」	(　猿２　)　みんなで象さんを助けてあげよう。
	(　猿３　)　そうしましょう。
	(　猿４　)　一人でだいじょうぶだよ。
	(　猿５　)　６ちゃんにしよう。
・　ところがはんたいに猿が引っぱられて、すとん。猿も穴に落ちてしまいました。	(　猿６　)　はぁい。よいしょ、よいしょ。 あっ、しまった。(穴に落ちる)
	(地の文２)　ところがはんたいに猿が引っぱられて、すとん。猿も穴に落ちてしまいました。
・　でも猿は象の鼻をのぼって外に出ました。	(地の文２)　でも猿は象の鼻をのぼって外に出ました。
	(　猿７　)　みんなで助けてあげようよ。
	(猿みんな)　そうしよう。 よいしょよいしょ(象を引っぱる)
	(　猿８　)　もう、くたびれたよ。
	(　猿９　)　もう、だめだよ。 狐さんを呼ぼう。
	(猿みんな)　狐さぁん。

このように、もとは単純な話も子どもの提案でふくらみが生じ、場面に面白さが出て、グループで動きや台詞の言い力を工夫させ練習させました。結果的には場面を考えたり練習を重ねることによって、何度もその文章を読むことになり、以前に学習した時よりも一層深く読み取ることができ、また読み取ったことを身体を使って表現することもできるようになったのは収穫でした。

またそれまで音読や発表が苦手だった子どもでも、劇の中で大きな声を出したことから自信がついて、授業でも別人のように大きな声で発表できるようになった子もいます。

6　漢字への興味

子どもたちは一年生の時から漢字に触れていたので、漢字にはたいへん興味をもっているようです。

朝、教師が教室へ来るまでの時間、ノートに漢字を使った言葉づくりをしている子、音や訓や画数を書いて、その後に言葉づくりをする子、さらに漢字の成り立ちにも関心を持ち、新出漢字の学習の際に自分からすすんで説明してくれる子などが大勢います。たとえば「渉」という名前の子は漢和辞典がひけるようになり、ある日「泪」という字を見つけ、目に水で「泪」になるのだとわかりました。彼は「僕の名前にも“氵”があるから、僕はよくなみだ(泪)が出るのかなあ」とお母さんに

話したそうです。

作文の時間にはしきりに漢字を使いたがって教師に漢字を聞きに来、たまに教師にもわからないことがあると、「辞典さんに聞いて」と言ったりします。最近では自分で辞典を持って来て調べる子も出てきました。

二年生でも、児童会主催の漢字読み方大会には進んで参加し、三年生に混って満点をとる子も回が進むにつれて増えてきました。

また子どもの日記などから、漢字には意味があるので同じ発音でも使い分けをしなければいけないということに気づくようになったのがわかりました。全体として言葉に対する感覚がするどくなって来たようです。

――例１　苺つみの勉強を終えて――

(江角美紀)

いちごつみの勉強を終えました。とっても楽しい勉強でした。まさひろ君の、「先生、熊の言葉を人間の言契にかえたらどうですか」と、もんだいが出て、それをずっとやっているうちに、楽しいいちごつみの勉強が終ってしまいました。

熊さんは、おこったり、かなしいことや、楽しいことがありました。でも女の子がはしらを立てたおれいに、スープやパンやミルクをごちそうしてくれたため、楽しかっただろうと、私は思います。もし私が熊だったら、大よろこびして山のすへ、「ありがとう、ありがとう」とかんしゃしてかえって行きます。

(尾高菜典)

僕は、正博君のおかげでいい勉強ができました。正博君が「『ウーフー』を人間の言葉にかえてみたらいいじゃないですか」といわれたから、僕もああそうかと思いました。(中略)

人間の言葉にかえてみると熊の気持ちがわかります。「ウッフー」とか「ウーフー」とか、いろいろあったけど、人間の言葉にかえてみたら、すぐ熊の気持ちがわかってきました。(後略)

――例 2　「かく」という言葉を「書く」と書いていいのか心配している日記――

2 月 24 日 (A君)

今日、四時間目のはじめに、書きとりのテストをされました。

はじめが、同じ画数で、最後が東西南北でした。

6 番の黒板に顔を書くの書くが、字を書くの書くでいいか、心ぱいでした。百点だったらいいなと思いました。

(担当　錦織博子･後藤育子)